



第29回

函館港イルミネーション映画祭

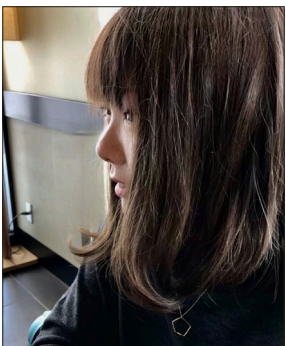
第27回シナリオ大賞

準グランプリ

函館の魔女

葉槻ユイコ





【作者プロフィール】

北海道出身。大学卒業後、新聞社や出版社などで記者、編集者を経てフリーの取材ライター。二〇一八年頃よりシナリオ執筆を開始

【あらすじ】

函館には、魔女がいる——明治から大正にかけて、目を見張る発展を遂げてきた街。表向きは豪商・相庭哲彦による多額の寄附やその手腕によるものだと言い伝えられているが、その影にはある魔女の暗躍があった。倉庫群、港、道路、その他観光施設に至るまで、いたるところに魔女の恩恵を受けているらしい。その魔女——唄名律は、明治時代から姿形を変えることなく、今なお函館の街に暮らしていた。

ある雨の夜、律は死にかけたコザクラインコを見つける。それから数時間後、律の自宅には傷だらけの少年の姿があった。雨上がりの晴れた空を見た少年はベランダに出て、まるで鳥が羽ばたくように落下。咄嗟に飛び降りた律は、少年を庇い地面に叩きつけられる。普通なら即死のはずだが、律は致命傷を負いながらも平氣そうにしていた。自分を助けたお礼をしたいと言う少年に、律は「大きくなったら私を殺してほしい」と願う。少年は小桜と名付けられ、律に育てられた。律の主治医である榑史木啓介を戸籍上の父親とし、人間として暮らしている。

やがて、大人になってきた小桜は、律について徐々に知っていく。かつてオーストリアから函館へわたってきたこと、それは恋人であり函館の大病院の子息である恋人についてきたこと。恋人に力添えするが、かなわぬ恋であったこと。そして小桜は、不老不死である律を殺す方法

にたどり着く。『魔女は愛で死ぬ』ということに。小桜がやってきてから、律の体は徐々に弱体化しており、ほとんど人間と変わらない状態になっていた。それは、律が小桜を愛し、小桜が律動を愛していたからに他ならない。小桜が愛するたび、律はどんどん弱っていく。

ある晴れた日、昔話をする律。小桜との思い出を語る表情は、愛に満ちていた。「私を殺してくれ」と願う律に、自分の思いを伝える小桜。『魔女は愛で死ぬ』という言い伝え通り、律は二度と目を覚ますことはなかった。

【人物】

唄名律（24）魔女

椰史木小桜（10）（18）律により人間にされたコザクラインコ

椰史木伸太郎（30）医者

椰史木啓介（40）律の主治医。戸籍上は小桜の養父

相庭優奈（18）小桜のクラスメイト

川野真理恵（18）優奈の友達

相庭哲彦（76）函館の豪商

相庭セツ（90）優奈の曾祖母

七夕祭りに参加する子供

通行人の祖母、孫

デイスービス職員

医師1、2、3

カップル男、女

ロープウェイ客の母親、子供

○基坂

明治時代の街並み。

坂を上ってくる椰史木伸太郎

(30)、長い外套を着ている。

表情は険しい。

○旧函館区公会堂・玄関

真新しい館内。

美しいピアノの音が響き

渡っている。アントン・ブルツ

クナーの『Erinnerung』(思い

出)。

伸太郎、しばらくピアノに聞き

入っている。

やがて曲が終わり、今度は『さ

くらさくら』。打って変わって、

たどたどしい。

伸太郎、思わず嘖き出してしま
う。

○同・大広間

ピアノを弾いているのは、唄名

律(24)。

伸太郎、傍に寄って、

伸太郎「桜が咲くのは、まだ先みたい

だね」

律、伸太郎に気づく。一瞬嬉し

そうにするが、すぐ不機嫌そう

に。

律「日本の曲は難しい」

伸太郎、律の隣で鍵盤を押す。

律、伸太郎と目配せ。

『さくらさくら』の連弾を始め
る。

律と伸太郎、楽し気にピアノを弾いている。

○同・外

よく晴れた昼下がりに。

律と伸太郎、並んで歩いている。

律「ああ、楽しかった。あんな新しいホールで弾けるなんて、さすが特権階級」

伸太郎「ただの町医者だよ」

律「ただの町医者は、そんな高そうなコートを着られませんよ？」

伸太郎、気まずそう。

律、気を取り直して、

律「素敵。あったかそう」

伸太郎「函館の春は、まだ遠いからね。

寒くてかなわない」

律「私は結構好き。：故郷の、春に似ているから」

律、自分の手を陽光に照らす。

雪のように真つ白な肌。

伸太郎、その手を取り外套の中へ。

伸太郎「冷やすといけない。ピアノが弾けなくなる」

律、照れながらも嬉しそう。

並んで歩きだす2人。

しばらく歩いてから伸太郎、意を決したように、

伸太郎「律。：お願いがある」

律、伸太郎の外套からゆっくり手を引く。

ばつの悪そうな伸太郎。

律、ふっと噴き出し、

律 「日本人は狡猾だ。そっちが先にそんな顔したら、文句の一つも言えない」

伸太郎 「ごめん」

律 「いいよ。…もう、慣れた」

○相庭邸・外観

旧相馬家住宅のような、起り

屋根造りの玄関。

表札には「相庭」とある。

○同・洋間

洋風の広い応接室。

律、丸テーブルにぼつんと

座っている。

哲彦の声 「いつもすまないね、椰史木くん」

伸太郎の声 「いえ。日頃のお力添えに少しでも恩返しができればと……」

ドアが開き、相庭哲彦（76）と

伸太郎が入ってくる。

律、無表情。

哲彦 「先日は、倉庫街の耐火を強化していただいたそうですね。心よりお礼申し上げます」

律、黙って頭を下げる。

哲彦、にこりと笑って、

哲彦 「唄名律さん、か。素敵な名前だ」
律 「気に入ってる」

伸太郎、照れた素振り。

哲彦 「きつと、歴史に名を刻むのでしょうね。この街はまだまだ発展するでしょうから。もちろん、あなたの力を借りて」

律 「それは光栄だね。で、本題は？」

哲彦 「家内が今、お茶を入れていきます。コーヒー知っていますか？ …… ああ、向こうの国では飲まれていらつしやったでしょうね」

律 「…日本人のそういう、回りくどいところが嫌いだ」

伸太郎 「（たしなめるように）律」

哲彦 「あなたも日本人でしょう。どこから、どう見ても」

ノックの音。

夫人の声 「失礼します。哲彦さん、お茶をお持ちしましたよ」

哲彦、律に目配せ。

律は伸太郎をじっと見据えている。

ガチャ、とドアが開く音。

○市民宅・玄関

現代。

一般的な一軒家。

ドアを開ける住人。

目の前には、浴衣姿の子供たち。子供「（歌って）竹に短冊七夕祭りに祝おう ローソク一本ちようだいな」

○市街地

七夕飾りで彩られている。

あちこちに、浴衣で歩く小学生たちとその親の集団。

そのなかに、ちらほらと魔女の仮装をした女の子の姿。

通りがかりの祖母と孫、遠目に

見ながら、

孫 「おばあちゃん。どうして七夕なの
に、魔女の格好した子がいるの？」
祖母 「それはね。函館に、魔女がいた
からさ」

孫 「えー、うそだあ」

祖母 「本当だよ。元町のあたりに住ん
でたんだって」

ポツポツと急に雨が降ってく
る。

祖母 「あらあ、風邪引いたら大変だ」

慌てて軒下へ向かう祖母と孫。

すでに傘を指して歩いている
女性とすれ違う。

それは、律。明治時代と容姿は
変わっていない。

タイトル『函館の魔女』

○マンション・外（夜）

すっかり大雨。

傘を差した律、エントランスに
近づいてくる。

風で傘がひっくり返る。

律 「おっと」

傘を直しながら、視線を落とす

律。

律 「なんだ、これ……」

足元には緑やオレンジといった
色鮮やかな羽根が無数に散ら
ばっている。

羽根は花壇の植え込みへ続いて
いる。

律、しゃがみ込んで植え込みを

かき分ける。驚いた表情。

ぐったりと横たわる、コザクラ
インコの姿。

律 「こりゃ、死んだな」

○律の自宅・寝室（夜）

20帖ほどの寝室、クイーンサイズ
の天蓋付きベッドだけが
置かれている。

眠っている小桜（10）、頭には
丁寧に包帯が巻かれている。

目を覚ました小桜、ガバッと
起き上がり周りを見回す。

小桜 「どこ、ここ？」

ふと、隣に眠る律が目に入る。

小桜 「！」

小桜、驚いて律を突き飛ばす。

律 「（寝ぼけながら）うっ」

小桜、自分の手を驚いたように
見つめながら、

小桜 「手……人間！ 人間になってる！」

律、立ち上がりながら、

律 「元気いっぱいだな」

小桜、羽ばたくように両手を広
げる。が、飛び上がることにすらできな
い。

律 「足もひどいケガだった。いきな
り動かないほうがいい」

布団をめくる律。

小桜の足。包帯が巻かれている。

小桜 「足……人間の、足が生えてる！」

小桜、混乱しながらもベッドを
飛びだす。

ドアを開け、走って廊下へ。

すぐに足がもつれて転ぶ。

律 「人間の足で走るのは、ちよつと難しいと思うぞ？」

あつけにとられている小桜を、律がひよいと抱き上げる。

小桜 「（抵抗しながら）やだ、やだ！」
律 「こら、暴れんな」

小桜 「人間になつてゐる！ どうして！」
律 「あんま動くと……」

小桜からキュルルルルと腹の虫の音。

○同・リビング（夜）

アンティークの長テーブルに、野菜や果物、パンや生の米などがずらりと並べられている。テーブルにしがみつく小桜、

じつと皿を見つめている。

律 「どれなら食べられそうだ？」

小桜、クッキーが盛られた皿を見つめる。

唇を尖らせ、クッキーを啄み始める。口をうまく使えず、全然噛めていない。

見かねた律、クッキーを細かく砕き、小桜の口元へ。

律 「ん。腹、減つてゐるんだろ」

小桜、意を決したように律の手元からクッキーを啄み、咀嚼。

律、もう一度クッキーを砕き、口元へ運んでやる。

小桜、どんどん食べるスピードが上がっていく。やがて律の手からクッキーを奪い、手で持つ

てガツガツと食べ始める。

律、小桜を眺めながら、

律 「あんなところで何してたんだ？」

小桜 「……迷った」

クッキーを一枚食べ終えた

小桜。

律、代わりのクッキーを手

取り、小桜へ手渡す。

小桜、受け取りかけて、

小桜 「あなたは、何者？」

見つめあう律、小桜。

律、真剣なまなざしで、

律 「……さあな」

小桜、自分の手や腕、髪の毛を

触りながら、

小桜 「もしかして、魔法使い！？」

律、無表情のまま。

律 「お前、物知りだな」

小桜 「見てたから、前のご主人様が。

テレビで、いっぱい。どーんって、ぱー

んって、使ってた。びっくりしたら、

魔法ってやつだって、教えてくれた。

（流ちょうに）ちんぷいちんぷい、ち

んからはいはい！」

律、表情を変えず。

律 「お前、帰る場所あるのか？」

小桜 「……ない。いらないうって、言わ

れたから。うるさいから、いらないう

だって」

律 「そっか。じゃあ、私とおんなじだ」

小桜 「おなじ」

律 「傷が治るまで、好きだけここ

にいれればいい。人間の体に慣れるまで、

時間もかかるだろうしな」

小桜「どうして？　どうして、助けたの？」

律、考え込んで、

律「出来心」

小桜「（単語の意味が分からず）でき……？」

律「気が向いた。それだけだ」

律、広げた食材を片付け始める。

小桜、自分の手をじっと見つめて、それから律の動作を観察。

律がリングを掴んだ手を、上から重ねる。律の手をぐにぐにと

掴む。

小桜「不思議、手」

律「そういえば、名前。なんていうんだ？」

小桜「鳥」

律「……お前の元主人は、センスがいな。人間としては、最低だが」

○同・寝室（夜）

律、小桜をベッドに寝かしつけている。

しばらく何かを考えた後、思いついたように、

律「……やっぱり、小桜だな」

小桜「小桜って何！？」

律「お前の新しい名前」

小桜「へえ。へー！（さえずるように）こざくら、こざくら」

律「いいから。もう寝ろ。おやすみ、小桜」

小桜「……おやすみ、律さん」

律、電気を消して出ていく。

小桜の視界は真っ暗に。

小桜「見えない、何も」

小桜、手を宙にかざす。

小桜「……でも、怖くない。あったかい」

○同・リビング（朝）

遮光カーテンの隙間から、日の

光が差し込んでいる。

ダイニングテーブルには開いた

ままのノートパソコンと五線

譜。その傍らに、律が突っ伏し

て眠っている。

小桜、ひよこひよここと歩いてく

る。

おそろおそろカーテンを開ける

と、陽光が差し込む。

小桜、きらきらと瞳を輝かせる。

そのままベランダの窓ガラスに
突っ込んでいく。

律 「ん……」

のそのそと起き上がる律。

額を押さえてうずくまっている

小桜を見て、笑う。

律 「おはよう」

小桜「（インコのように）オハヨウゴ

ザイマス」

律 「なんだ。外、出たいのか」

律、窓を開けてやる。

小桜、律を押し上げるように

手すりに上る。飛び立つように

両手を広げる。

律 「あ、おい。ちよつと待て」

踏ん張り、飛び降りる小桜。

羽ばたくように手をばたつかせ

るが、小桜の体は約十五メートル下の地面へ真つ逆さま。

小桜、自分の手を見て気づいたように、

小桜「！　ない、飛べない！」

迫る地面。

小桜、覚悟したように目を瞑る。

瞬間、律が小桜を抱きかかえる。

同時に、2人の体は地面へ叩きつけられる。

○マンション・裏口付近（朝）

小桜を守る体勢で、律が下敷きになっている。

ぴくりともしない律の腕の間

から、小桜が顔を出す。

小桜「律さん、律さん……？」

地面にはじわりと血が広がっていく。

小桜「だめ、やだ……だめだ！」

律の身体を揺する小桜。

律「う……」

小桜「生きてる？」

律、まるで昼寝から目覚める

ように起き上がる。

頭から流れる血を、鬱陶しそう

にふき取りながら、

律「やっぱり、まだ死ねないか」

あっけに取られている小桜に、

律「無事か？　ケガ、増えてない

か？」

小桜の頭を撫でる律。

小桜「どう、して？　生きてるの、な

んで？」

律、悲しそうに笑って、
「死ねないからだ」

○律の自宅・リビング（朝）

ひっくり返る救急箱。

小桜、飛び出した包帯を掴む。

ソファで横になっている律。

プラプラと垂れた腕は折れ、

青黒く腫れあがっている。

その腕を掴み、小桜がぐるぐる

と巻いていく。

律 「すぐ治るから平気。（痛みが走

り）っ……てえ」

小桜「でも、してもらった。痛くなかつ

た、こうしたら」

小桜、試行錯誤しながら包帯を

巻いていく。

くすぐったそうに眺めている
律。

気恥ずかしさをごまかすよう
に、

律 「昔ならあつという間にもう治つ

てただけだな。やっぱり、だいぶ力

が弱まってきている」

小桜「よくないこと、それ」

律 「よくない。よくないけど、私に

とってはいいことではあるんだ」

小桜「……？」

律 「悪い。難しかったな」

小桜「ヨクワカリマセン」

律、ふつと笑う。

なんとか包帯を巻き終えた

小桜。

小桜「できた」

律 「ありがとな。助かった」

小桜、急に震えだし、

小桜「…許して。いい子じゃないから、こんな…律さんを、こんな目に遭わせて」

律 「別に、怒ってない」

小桜「ごめんなさい、ごめんなさい。なんでもしますから…」

律 「なんでも、か……」

少し考えてから律、震える小桜の肩を掴んで、

律 「小桜。お前に一つ頼みがある」

小桜「頼み？」

律 「お前が大きくなって、今よりうんと強くなったら…私を、殺してほしい」

小桜、よくわかっていない様子。

小桜「ころす」

律 「死なせてほしい。私を」

小桜「しぬ」

律 「そう。人間の体に慣れていない今はまだ、お前は首を絞める力もない。温かい心臓に冷たいナイフを突き刺す勇氣もないだろう。もしそれが、できるようにになったら…」

小桜、晴れやかな目で、

小桜「わかった！ 大きくなったら、律を殺す！」

律、心底安心した顔で、

律 「約束だぞ」

包帯を救急箱にしまう小桜。

ふと、床に散らばった五線譜が目に入る。

手書きの音階を、じっと目で追

う小桜。

律、テーブルの上のタブレットを開き、
キーボード演奏ができるアプリ
を起動する。

律 「小桜、おいで」

膝を叩く律。

小桜、嬉しそうに飛び乗る。

律 「歌は得意だろ」

小桜 「歌？」

律 「さっきお前についてネット調べ
たら、おしゃべりは苦手だがリズムに
乗るのは得意って書いてあったぞ」

律、キーボードの「ド」を弾き、

律 「(歌う) ド～」

律、小桜の顔を覗き込む。

小桜、少し照れ臭そうに、

小桜 「(完璧に音が取れた) ド……」

律、キーボードの「レ」を弾き、
律 「レ～」

小桜 「レ～」

律、即興でメロディを作り両手
で演奏を始める。腕の変色は
収まり、すっかり骨折は完治し
ている。

小桜、突然始まった演奏に驚き
ながらも、嬉しそうにハミング
を始める。

たどたどしさが消え、どんどん
美声になっていく。

○同・風呂場

浴槽に浸かっている小桜。

手を羽のように広げ、ばしゃば
しゃと水を飛び散らせる。

飛んできた水滴に驚き、

小桜「ぎゃーーーーーーー!」

大暴れ。

服を着たままの律、小桜をなだめながら、

律「暴れなきや怖くもなんともねえから」

小桜、足を滑らせて浴槽にドボン。

ひととき大きく水しぶきが飛び、頭から水を被る律。

○同・キッチン

律、野菜を包丁で細かく刻んでいる。

後姿を恨めし気にみている

小桜。

律、振り返らないまま、

律「食わなきやだめだぞ」

小桜「どうして!」

律「お前が人間として生きていくうえで栄養が必要だからだ」

小桜、トタトタと律の横に来る。律を見上げて、

小桜「食べなきや、ダメ?」

律「(ほだされかけるが)……食べなきや大きくなれない」

小桜「大きくならなくていいもん!」

律「約束、忘れたのか?」

小桜、グツと何か言葉を飲み込む。

ピーマンを指さして、

律「なんだ」

小桜「これ、苦い。もうちょっと小さ

くしてください」

ふっと笑う律。

小桜「あ！ 笑った！ かわいい！」

律、すぐ真顔に。

律「…かわいくない」

小桜「かわいい！」

律「うるさい。それ以上言うとおまえの大好きなピーマン、丸ごと入れるぞ」

小桜「好きじゃないもん！」

律「じゃあ、私のことは？」

小桜「(迷っている) ……」

律、笑って、

律「素直な奴」

○同・寝室（朝）

眠っている律。

小桜、勢いよく入ってきて、

小桜「律、おはよーoooooooooooo！」

律「……………はよ」

○同・小桜の部屋（夜）

ベッドに寝ている小桜。

添い寝している律、子守唄を歌い始める。

小桜、眠い目をこすりながら、子守唄を真似る。が、だんだん眠気に負け、次第に声が小さくなる。

小桜、律に甘えるように抱き着く。

律「…………おやすみ、小桜」

律、小桜を抱きしめたまま、子守唄を歌い続ける。

○高校・3年1組

放課後、ひと気のない教室。

かすかに小桜の声でハミングが聞こえてくる。

制服姿の小桜（18）。ネームプレートには「椰史木小桜」と書かれている。

小桜、カーテンに隠れ、窓を開けて外を向きヘッドフォンで音楽を聴きながら鼻歌。

カーテンの外側に、相庭優奈（18）が立っている。

優奈がカーテンを開けるが、小桜は気づかない。

優奈、小桜の肩を叩く。

ヘッドフォンを外して振り返っ

た小桜に、

優奈「歌、上手だね」

小桜「ありがとう」

小桜、スマホの一時停止ボタンを押す。

「NO TITLE」の文字。

優奈「それ、いつも何の曲聞いているの？」

小桜「ノータイトル！」

再生ボタンを押そうとする

小桜。

優奈、慌てて、

優奈「椰史木くんのお父さん、校門に迎えに来てるよ。呼んできてって頼まれたんだ」

○車内

小桜、助手席でむくれ顔。

運転席には柳史木啓介（40）。

小桜「……迎えに来なくていいのに」

啓介「回診のついでです。それにこういうの、父親っぽいでしょう」

小桜「ぱぱー！ お小遣いちょうだい！」

啓介「いいですよ。後ろのカバンに財布が入っているので、好きなだけ持っていくなさい」

小桜、動かずそのまま窓の外を見ている。

啓介、何か言いたげに横目で小桜を見るが、何も言わない。

○律の自宅・リビング

ソファに仰向けて寝ている律。

啓介、注射の準備。

小桜がのぞき込み、針の先端を

見ながら、

小桜「（怯え）いーったあ……」

啓介「出てなさい」

小桜「おかしな真似すんなよ」

啓介「できるならとつくにやってる」

律「小桜」

小桜「律！ 頑張ってるね！ 痛かったらちゃんと言うんだよね！」

と言いながら、部屋を出ていく

小桜。

啓介、律の腕に注射。

啓介「相変わらず、ピーチクパーチクうるさい鳥ですね」

律「かわいく育っただろ？」

啓介、無言のまま作業を続ける。

○同・廊下

小桜、リビングのドア前に腰を掛け、中から漏れ聞こえる会話を聞いている。

○同・リビング

啓介、律の注射痕をじつと見ている。血が流れたまま。

律、得意げに、

律 「見ろ、どうだ！　すぐに傷が塞がらない！　すっかり治りが遅くなった！　老いが進んでいる証拠だ！」

啓介 「そうなんだ。見た目は全然、変わらないのに」

律、途端に無表情。

啓介 「…本当に死ぬんですか」

律 「死ぬよ。そのために生きてるんだから」

啓介 「…あいつを、小桜を人間にしてください。あなたが、こんなに弱ったのは」

○同・廊下

小桜、目を伏せる。

小桜 「俺のせい」

○同・リビング

啓介、ドアの方向を見る。

小桜の盗み聞きに気付いている様子。

律 「特別力を使ったからね。大変なんだ、動物を作り変えるってのは。あんな大仕事、自分の見た目を日本人に

作り替えたとき以来かもしれない」

啓介「そうですか」

律「なんだ。寂しいのか？ 椰史木の医者どもは代々、私を殺すことをライフワークにしてきたじゃねえか」

啓介「持てる者には、持たざる者の心情なんて理解できませんよ」

律「嫌味？ 金持ちの言うことか？」

啓介「世の中はお金で買えないもの、ほうが多いんです」

律「例えば？」

啓介「…愛とか」

律「恋とか？」

啓介、診察道具を片付け始める。

律「こんな力、欲しいならいくらでもくれてやるのに」

啓介「…本当に、できないんですか？」

律「できたらとづくにやってる」

○同・廊下

リビングから出てきた啓介。

座り込んでいた小桜、玄関へ

向かう啓介の後を追う。

小桜「椰史木さん。俺、医者になりたい」

啓介「なんですか、いきなり」

小桜「医者になれば、律を殺せるんでしょ？」

啓介「…医者は、人間を生かすための仕事ですよ」

小桜「でもあんたは、律を殺すために医者をやってる」

啓介「殺すためじゃありません。不老不死は、人類の悲願ですよ？」

小桜「年取んないのと死なないのって、

そんなに偉いこと？」

啓介、小桜を睨みつける。

小桜、意に介さず純粹な目で、

小桜「うん、決めた。俺、医者になる。医者になって人間の体をよく知れば、律が上手く死ぬする方法が見つかるかもしれない！」

啓介、声を潜めて、

啓介「あの人は人間じゃありませんから」

小桜「律は人間だよ」

啓介「律さんが今年でいくつかわかりますか？」

小桜「二十四歳！」

啓介「あの人が二十四歳をやるのは、もう二〇〇回目くらいですかね」

小桜「……ってことは……」

小桜、指折り数えているが混乱している。

啓介「人間は三百年も生きられない。人間は致命傷を負っても回復できない。人間なら死ぬ……あの人は、死なない」

小桜「死なないから、人間じゃないのか？」

啓介、少し迷ってから、

啓介「そういえば、小桜くん。字は読めるようになりましたか？」

小桜「とくに！ あんたは俺を何歳だと思ってんだよ！」

啓介、鞆から古びたノートを

取り出す。辞書のように分厚く、表紙には何も書かれていない。

受け取った小桜、嬉しそうに開

く。

啓介「次の往診までに返せよ。間違っても電子化はするな。写真に撮るのも、文章を写すのも禁止だ。デジタルはすぐ情報漏洩する」

小桜「はいはい……」

小桜、文章を目で追ううちにだんだん表情が曇っていく。

○同・小桜の部屋

壁一面が本棚になっており、洋書や辞典など数多く並んでいる。

小桜、机に向かい古びたノートを読んでいる。

小桜、ページをめくる。ヨーロッパの魔女狩りをイメージしたス

ケッチが描かれている。火あぶりのイラスト。

小桜「どうして……」

小桜、ページをめくる。

開いたページには、律の写真が数枚張られている。すべて正面を見ており、無表情。どれも外見はまったく同じ、和服や洋服と着ている服だけが変わっている。

小桜「(手書きの文字をなぞりながら) 迫害から逃れ、日本に渡り、姿形を日本人に変えた。椰史木家がその存在を発見して以降は、秘密裏に行われている不老不死の研究対象として動向を観察している」

ノックの音。

律 「小桜。ちよつと来てくれ」

小桜 「わかった！」

一気に表情が華やぐ小桜。

ノートを閉じ、ドアに駆け出し
ていく。

○同・リビング

テーブルの上には五線譜が散ら
ばっている。

タブレットでキーボードを弾い
ている律。明るく弾むような
アップテンポ。

小桜、曲に合わせてハミング。

弾き終えた律、小桜のリアク
ションを窺う。

小桜 「（嬉しそう）すごいねえ、楽し
いねえ！」

律、ほっとしたように、

律 「今回は当てられそうか？」

小桜 「んー……（考えて）こないだ、
俺と律と一緒に作ったパンケーキの
歌！」

律 「残念。初めて、お前を風呂に入
れた時の歌だ」

小桜 「えー！ そんな昔の話、忘れて
よ！」

律 「私にとっちゃ、つい昨日のこと
だな。大変だったんだぞ。大暴れする
わ、風呂の水はガブガブ飲むわ、滑っ
て転ぶわ、わんわん泣き喚くわ」

小桜 「もう、過去の失敗話じゃん！
恥ずかしい！」

律 「大丈夫だ。お前の恥ずかしい風
呂エピソードをテーマにしたこの曲は

日本屈指の名クリエイターによって大幅に改変され、一か月後には訳の分からんアイドルグループが歌ってる」

小桜「ねえ。律は、どうして音楽を作り始めたの？」

律「前にも言っただろ。暇だったからだ」

小桜「でもさ、ほかに時間もあればやれることって、いっぱいあるでしょ？ 絵を描いたり、小説を書いたり」

律、画面から顔を上げて、

律「…かわいくない」

小桜「なんで！ 俺、かわいくない！？ こんなにかわいいのに！」

律「お前、本当に賢くなってきたな」

律、手を伸ばす。

小桜、律に向けて小鳥のように頭を差し出す。

わしわしと撫でる律。

律「……昔、世話になった奴に教わったんだ」

小桜「いつ？ 昭和歌謡書いてた頃？ それとも、クラシック作ったとき？」

律「よく覚えてるな」

小桜「律の話は全部！」

律、撫でていた頭を小突く。

小桜「痛っ！」

律「いいから。その脳のリソースを学校の勉強に使いえ」

小桜「えー……別に。勉強は嫌いじゃないけどさ」

律「医者になるんだろう？」

小桜「おっさんとの話、聞いてたの！」

律 「椰史木さんのコネにも限界がある。今からなら浪人前提とはいえ、必死こいて勉強しとかねえと医大受験で一生終わるぞ」

小桜「…一生」

律、再びタブレットでメール操作。

律 「…嬉しかった。私を殺すためって、言ってくれたこと」

小桜「とーぜん！」

小桜、律に抱き着く。

小桜「だって俺、律を殺すために生きてるんだから！」

律 「……うん」

律、小桜を抱きしめ返す。

小桜、律の頭を優しく撫でる。

○高校・3年1組

放課後、生徒たちが続々と教室を出ていく。

小桜、帰り支度をしている。

優奈と川野真理恵（18）、遠く

からチラチラと小桜の様子を見ている。

真理恵「ほら、優奈。今日しかないって」

優奈「でも……」

真理恵「お似合いだよ、あんたら。あ
の大病院の親せきと、この町一番の名
家の跡取りと」

優奈「そういんじゃないし……」

真理恵「あーもう！（小桜に向かっ
て）椰史木くん！」

顔を上げる小桜。

優奈と真理恵、小桜の前に来て、

真理恵「今日、暇？」

小桜「暇：ではない、かな」

残念そうな優奈。

真理恵、怯まずに、

真理恵「なにすんの？」

小桜「レコード屋行く」

優奈「あ、そつか。音楽好きだもんね」

真理恵、割り込むように、

真理恵「レコードって、あのドーナツ

みたいなやつ？ あれ、優奈んちに

いっぱいなかったっけ？」

優奈「ちよつと、真理恵」

小桜「ほんと？ いっぱい！？」

真理恵「そーそー。ほら、優奈んちつ

てすつごい金持ちじゃん？ お父さん

だかおじいちゃんだかの部屋に、本と

かCDとか、レコードとかいーっぱい

あんの。すごいよ、図書館みたい。：

見せてもらえば？」

小桜「（無邪気に）え、行きたい！」

優奈「ええー……ええー……」

戸惑う優奈。

真理恵、一仕事終えたような顔。

○律の自宅・寝室

ベッドに寝ている律。

スマホが震え、メッセージを

確認。

律「（読み上げ）友達の家行ってくる

……（打ち込みながら）了解。寝てる

からチャイム鳴らして」

律、スマホを置く。

複雑そうに、

律「友達、か……大きくなったな、あ

いつも」

○相庭邸・外観

明治時代から変わらぬ外装。

○同・書斎

壁一面が本棚になっている。

古い洋書、レコードが整理されて収まっている。

小桜、迷わずレコードの棚へ。

素早い動作で作曲名を確認していく。

優奈、コーヒーを持って入ってくる。

優奈「ひいおばあちゃんの、おじいちゃんの趣味なの」

小桜「相庭のひいばあちゃんの…おじ

いちゃん？ たしか、すごい偉いひとだったんだよね。いっぱい寄附して、いっぱいいいことした。小学校で習った」

優奈「あはは…」

小桜「いい人だったんだね」

優奈「そんなことがわかるの？」

小桜、テーブルに棚から取り出したレコードを並べる。作曲者名は「律川あきら」「唄えん」「オ・ピュール」などバラバラ。

小桜「趣味が一貫してる」

○同・洋間

小桜と優奈、テーブルに向かい合い、英語の教科書を広げている。

小桜「自動詞、他動詞……？　うー、わっかんねえ！」

優奈「でも、ほかの科目に比べたらかなりできてるほうだよ。英語、得意なんだね？」

小桜「そうかも。音楽聞いてたら、自然と覚えた単語とかいっぱいある」

優奈「どうして、医者になろうと思ったの？」

小桜、回答に迷い答えあぐねる。

優奈「あ、その……音楽が好きなら、音楽の道に進まないのかなって思ってる。椰史木くん、いつも鼻歌歌ってるでしょ。歌、うまいんだし」

小桜「……大事な人が、望んだから？」

優奈「……大事な人？」

小桜「うん。その人が望むことなら、

なんだってかなえてあげたい。……俺は、そのために生きてるから」

優奈「……その人って、家族？」

小桜「（小声）家族……うーん、家族……は、一応、あのおっさんってことになってるしな……」

優奈「恋人？」

小桜、少し考えて、

小桜「恋人って、何？　どういう人？」

優奈、驚きながら、

優奈「えーっと……好きな人同士、かな」

小桜「好きな人同士……そう、それだ！俺と律は、恋人なんだ！」

優奈「りつ、って言うんだ……」

小桜、嬉しそうにはしゃいでいる。

ショックを受けてる優奈。

○同・玄関

優奈、小桜を見送ってる。

小桜、レコードが入った紙袋を持っている。

小桜「これ、助かった。ありがとう」

優奈「返すの、いつでもいいから」

外からワゴン車の音。

優奈「あ。ひいおばあちゃん帰ってきた」

優奈も靴を履き、玄関を出ていく。

○同・外（夕）

デイスerviスの送迎ワゴンが

停まっている。

相庭セツ（90）、職員に車いす

を押されながら降りてくる。

職員「あ、セツさん。優奈さんがお迎えにきてくれたよ」

セツ、ニコニコしながら職員に会釈している。

優奈「おかえりなさい」

優奈、職員と車いすの持ち手を変わる。

職員、車いすの昇降シートを収納し始める。

セツ、玄関から出てきた小桜をじっと見ている。

その様子に気づいた優奈、不思議そうに、

優奈「どうしたの？」

小桜、セツの視線に気づいて

会釈。

セツ「その顔立ち。あなた、椰史木の
人？」

小桜「えっ」

優奈「そう。椰史木くん。椰史木小桜
くん」

セツ「とてもいい名前ですね」

小桜「どうも」

セツ「魔女は元氣？」

小桜、一瞬驚くが動揺を隠す。

優奈「魔女？ 何言ってるの、おばあ
ちゃん」

セツ「函館には魔女がいるのよ」

職員、割って入ってきて、

職員「相庭さん。それでは、また来週。
お待ちしておりますね」

優奈「あ、はい。ありがとうございます」

職員を見送りに行く優奈。

小桜とセツ、そのまま見つめ
合っている。

セツ「若くて綺麗な方だったわ」

小桜「今もです。…今も、綺麗な人です」

セツ、にこりと微笑みながら、

セツ「お変わりないようですね」

優奈、2人のもとへ戻ってくる。

小桜、踵を返し帰路へ。

○マンション・廊下

律の自宅前。

小桜、インターフォンを押して
いる。中から応答はない。

小桜「もー。ピンポン押して起こせつ
て言ったくせに」

○律の自宅・寝室（夜）

真つ暗。

ガチャガチャと鍵を開ける音がして、小桜が入ってくる。

小桜「律！　どんだけ寝てんの！　もう夜だよー！」

小桜、電気をつける。

ベッドの律、もそもそと動く。

小桜、ベッドのふちに座る。

小桜「おはよう」

律「…はよ」

小桜「今日ね、律が昔作った曲いっぱい聴いた。何枚か借りてきたんだ」

小桜、袋からレコードを取り出して律に見せる。

律、そのうちの一枚を手取る。

律「まだ残ってたんだな」

小桜「残るよ。いつまでも。律の作っ

た曲だもん」

律、ジャケットからレコードを取り出す。その拍子に、一枚の手紙が飛び出す。

小桜が拾い上げ、読みながら、

小桜「謹呈。相庭さんへ…椰史木伸太郎」

律「謹呈なんて、難しい字読めるようになったな」

小桜「あのおっさんと同じ苗字」

律「友達って、相庭の子か？」

小桜「あ、うん…坂の上の家の」

律「そうか。いい子と友達になったな」

起き上がろうとする律だが、体が怠い。

小桜、律の背を支える。

律 「悪いな」

小桜 「俺と律って、恋人？」

律、驚いたような顔で小桜を見

つめる。

小桜 「律って、俺のこと好き？」

律 「好きじゃなかったら、一緒に暮らせないだろ」

小桜 「じゃあ、恋人同士だ」

律 「恋人じゃない。どっちかという
と家族だな。家族愛ってやつだ」

小桜 「俺の家族は、あのおっさんなん
でしょ？」

律 「戸籍上はな。私の子供ってこと
にするわけにはいかなかったから」

小桜 「：俺さ、さすがに知ってるよ。
恋とか、愛とか。その違いとか」

律に近づく小桜。

律、小桜を押しつけて、

律 「そういうのは、同級生とやんな」

小桜 「どうして」

律 「こちとら300歳過ぎたおばあ
さんだ」

ベッドから這い出る律。

律 「おいで。ごはんにしよう」

小桜 「……うん」

律、歩くのも辛そう。

○函館 椰史木病院・外観

500床以上の大病院。

○同・会議室

20席ほどのテーブル配置。

白衣を着た男性医師数十人が
座っている。

医師1「魔女が死ぬだと！　いいか、絶対に死なせるんじゃないぞ！」

医師2「もし死んだら、魔法の効果はどうなるんだ？　市電もロープウェイも止まっちゃうぞ」

医師3「そんなことより、不老不死だ！　まだ何も究明できていない！　人類の悲願だぞ！　解明せずに死なせるわけにはいかない！」

啓介、うつろな目で立っている。

○同・駐車場

啓介、車のカギを開ける。

運転席に乗り込むと同時に、

制服姿の小桜が助手席に乗り込む。

啓介「学校は？」

小桜「……休み」

啓介「珍しいですね。こんなところで」

小桜「来るなって言ってたのはそっちでしょ」

啓介「で。父親の言いつけを破ってどうしたんです？」

小桜「今朝、血を吐いた」

○律の自宅・洗面所

流しっぱなしの水道。

律、呆然と水の流れを見つめている。

○函館 椰史木病院・駐車場

啓介「まだ手術が必要な段階ではないので、そこまで気に病まなくても大丈夫

夫ですよ」

小桜「病院には行きたくないって」

啓介「でしようね」

小桜「：俺。どうしたらいいか、わかんなくて」

うなだれる小桜。

啓介、エンジンをかける。

○金森赤レンガ倉庫群・付近

啓介と小桜が乗った車、走っていく。

○漁火通り

啓介と小桜が乗った車、走っていく。

○湯の川温泉街

啓介と小桜が乗った車、走っていく。

○車内

小桜「……これ、なにしてんの？」

啓介「あの倉庫群は、世界有数の耐火建築が施されているといわれています。夜になると見えるイカ釣り漁船には漁火が灯されます。このあたりの温泉街は、明治から大正にかけて大きく発展しました」

小桜「社会の授業？」

啓介「この街のいたるところに、あの魔法がかかっているんです」

小桜「もし律が、死んだらどうなるの？」

啓介「わかりません」

小桜「……うち、帰る。律が待ってるから」

○律の自宅・寝室

眠っている律。

小桜、そっとドアを閉める。

○同・リビング

啓介、コーヒーを2杯淹れている。

入ってきた小桜、ソファに座る。

啓介「飲みますか？」

小桜「……いい」

啓介、一つだけカップをもって

小桜の隣へ。

小桜、ベランダを見ながら、

小桜「初めて会ったとき、あそこから

律が飛び降りたんだ。普通、死ぬんだろ？ でも、生きてる。私は死なないからって、ピンピンしてた」

啓介「……何年前の話ですか」

小桜「8年前だ。すぐ治った……魔法みたいに」

啓介「8年前だからです。……まだ、あなたに……あなたを作っていなかったから……」

小桜「……やっぱり、俺のせいなんだな」

啓介、コーヒーを一気に飲み干す。

半ばやけくそになりながら、カバンから書類の詰まったファイルを取り出す。

乱雑なファイルのなかから、古びた一枚の写真を小桜へ渡す。

受け取る小桜。

小桜「……これ、誰？」

啓介「どこからどう見ても、君だね」

色褪せた写真に写る、若き日の
椰史木伸太郎。小桜とそっくり
な顔立ちをしている。

啓介「ひいじいさんのその前の……に
かく、私の何代か前の方です。彼が……
椰史木伸太郎が、魔女を函館に連れて
きたと言われています」

小桜「連れてきた？」

啓介「もともとは、オーストリアの方
です」

小桜「でも」

啓介「髪も瞳も黒色に、肌も骨格も声
も、すべて日本人に作り変えたそうで
す」

小桜、写真をじっと見つめてい
る。

小桜「そこまでして、どうして」

啓介「恋人だったからですよ」

小桜、写真を持つ指に力が入る。

啓介「魔女は不老不死と言われている。
……ただ、だからといって死ぬ方法
がないわけではない」

小桜「『魔女は愛で死ぬ』。あんたにも
らったノートに、メモってあった」

× × ×
(フラッシュ)

小桜、机に向かい古びたノート
を読んでいる。

× × ×

啓介「どこから持ってきた伝承なのやら。本当かどうかは、定かではありませんが……」

小桜「でも、律は信じてる」

啓介「そして、実践している」

小桜「……俺を、伸太郎って人に似せて人間にしたのは、俺を愛するため……愛した人を、もう一回愛するため……?」

沈黙。

遠くから、ドアを閉める音。

少ししてから、律が入ってくる。

律「……帰ってたのか」

小桜「ただいま」

律「おかえり。……ずいぶん早いな?」

小桜「ご、午前授業」

律「ふーん……」

啓介「体調はどうですか?」

律「最低だよ。最低で、最高」

小桜、複雑な表情。

啓介「では、出かける支度をしてください」

律「は?」

啓介「久しぶりに、親子水入らずといきましょう」

○函館山（夜）

眼下に広がる美しい夜景。

観光客たちの合間を縫って、

律と小桜が歩いてくる。

小桜「うわぁ、綺麗……!」

律「なんだかんだで、初めて来たんじゃないのか?」

小桜「うん。……あ、小学校の時に、遠

足で来たかも？ 昼間だったけど」

律、感慨深そうに夜景を眺めている。

律 「なんで世界三大夜景なんて言われてるか、知ってるか？」

小桜 「律がいるから」

意表を突かれた律。

小桜 「律が、ここにいるおかげに決まってる」

無言になる律、小桜。

近くにいた男女カップル、様子を窺いながら近づいてきて、

カップル女 「すいません。写真、撮ってもらっていいですか？」

小桜 「ああ、はい」

スマホを預かる小桜。

夜景をバックに寄り添う男女。

小桜 「はい、チーズ」

撮った写真を確認する男女。

カップル男 「ありがとうございます」

男女、嬉しそうに去っていく。

その後姿を見ている律。

律 「あんな小さい箱に、何百枚何千枚と写真が保存できる。一昔前までは考えられなかった。そんな、魔法みたいなこと……もう、魔女なんかいなかったって、この街はうまくいく」

何か言おうとする小桜。

せき込んでしまう律。

小桜 「…律。帰ろう」

小桜、律の手を引こうとする。

律、その手から離れ、

律 「小桜。願い事は？」

小桜 「うん？」

律「まだ間に合う。まだ、できる。最後に一つだけかなえてやる。…お前の、願い事はなんだ？」

小桜「律の願いを叶えること」

律「…そうじゃなくて。お前の…」

小桜「それが、俺が生きてる意味だから」

小桜、律の手を取る。

小桜「律が思うままにいてくれれば、それでいい」

小桜、律の手を引いて歩き始める。

律、一瞬柔らかい笑顔に。が、すぐに険しい表情。激しくせき込み始める。

周囲の観光客も、何事かと振り返っている。

小桜「…：律？ 律！」

騒ぎに気付いた啓介、すぐに2人に駆け寄る。

○律動の自宅・寝室（夜）

眠っている律。

○同・玄関（夜）

座り込み、靴を履いている啓介。

小桜「いろいろありがとう。おっさん」

啓介「あと2、3日だろうな」

小桜「…：うん」

立ち上がる啓介。

啓介「すごいな、お前は」

小桜、啓介をにらみつける。

啓介「…薬殺刑に使われるような薬を20年投与し続けても、殺せなかった

んだ」

小桜、啓介につかみかかる。

が、すぐに離す。

小桜「……どうしたらいい。どうしたら、律を助けられる？」

啓介、首を横に振る。

小桜「……なんでだよ。医者だろ！ 助けろよ……」

啓介「医者は人間を助ける仕事だ。生きたいと思ってる人を、生かすための仕事だ。……あの人にかかわるようになって、わかったんだ。死にたがっている人間……人間じゃない人間には、なすすべはない。それに、どのみちもう、あの状態は手遅れだ」

小桜「……じゃあ、どうしたら、いいんだよ……」

啓介「あるだろ……お前にしか、できないことが」

○同・寝室（朝）

小桜、ベッドに突っ伏して眠っている。

律、起き上がって小桜の頭を撫でる。

小桜「ん……」

律「起こしたか」

目を覚ました小桜、驚いて、

小桜「起きて大丈夫なの？」

律「ああ。なんだか今日は、気分がいいんだ」

律、窓から差し込む光を眺めている。

律「お前がベランダから飛び降りた

のも、こんな朝だったな」

小桜「：馬鹿だな」

律「いや。そういえば、そうだよな。昨日まで空飛んでたやつなら、いい天気だったら飛んでいきたくなるよな：どこまでも」

小桜、律の横顔を見ている。

小桜「俺を伸太郎さんに似せたのは、俺のことを好きになるため？」

小桜を向く律。

少し考えてから、

律「そうかもしれないが、そうじゃないかもしれない。とっさに浮かんだのが、あの人の顔だっただけじゃないのか」

小桜「：伸太郎さんのこと、好きだったんじゃないの？」

律「好きだった」

小桜、傷ついたような表情。

律「でも、愛はなかった」

小桜「：違うの？ 俺、伸太郎さんの代わりじゃないの？」

律「疑うのか？ 私が死ねていないのが、何よりの証拠だろ。一方的に好きでいるだけの感情は、愛とは呼ばない」

○（回想）基坂

明治時代。

並んで歩いている律、伸太郎。

伸太郎の外套のポケットに手を入れ、手をつないでいる。

律「ねえ、伸太郎さん。今日は、これから……」

伸太郎、何かに気づき、

伸太郎「あっ」

律の手を、外套から無理やり

引っ張り出す。

伸太郎の視線の先には、ある

女性——伸太郎の婚約者の後ろ

姿が。

伸太郎「……ごめん」

律「……うん」

駆けていく伸太郎。

律、歩くのを止める。

婚約者に追いつき、手をつなぐ

伸太郎。

その後姿を、じっと見つめてい

る。

（回想終了）

○律の自宅・寝室（朝）

せき込む律。抑え込んだ手のひ

らから、血がにじんでいる。

その手を取り、握りしめる小桜。

律「もう、気づいてくれたんだな。

私を、殺す方法」

小桜「ねえ、律。：愛って、何？」

律、少し考えて、

律「せっかく作ったカレーライス

食わず嫌いで残されても、許せること」

小桜「：ねえ、それ」

律「大暴れされても根気強く風呂を

覚えさせること、食わず嫌いの野菜を

食べさせること、嫌だと泣いて叫ばれ

ても朝学校へ送り出すこと、おはよう

とおやすみを言えること、抱きしめる

こと……ベランダから飛び降りられた

ら、自分も飛び降りて身代わりになること」

小桜「……ねえ、それ…全部」

「俺のこと」と言いかける小桜。

律、遮って、

律 「全部、音楽に残したつもりだ。お前によく似た人が言ってたんだ。私がここで死んでも、音楽は死なない。旋律さえ記してあれば、その時代に生きる人間がいつでも旋律をよみがえらせてくれるって」

小桜「……いやだ」

律 「別に後世に残すほど大層なものでもねえが…お前が寂しくなった時、誰かが歌ったり奏でたりしてくれたら、気も紛れるだろ」

小桜「いやだ！ いなくならないで！」

律 「歌、うまかったもんな。医者もいいけど、音楽で生きていけると思うぞ」

小桜「やだ。やだ…」

小桜、泣き出しそうな顔。

律 「本当は、ちよつと後悔してる」

小桜「え…？」

律 「だって、こんな…お前と、小桜と、こんな風に暮らすのが楽しいなんて…幸せなことなんだって、思いもしなかったから…」

小桜「じゃあ…」

律 「長生きはするもんだな」

小桜「もっと生きようよ、律…」

律、首を横に振る。

律 「約束が違う。小桜は、私を殺してくれるんだろ？」

小桜「うん」

律「だったら、そんな顔するな」

小桜「…うん！」

小桜、無理やり笑う。

律、笑っているが、やがて激しくせき

込んでしまう。

小桜「律！」

小桜、律を横向きに寝かせる。

律、小桜の手を握り、

律「小桜。私を、殺してくれ」

小桜「…今？」

律「ああ。死ぬなら、こんな日がいい。

…空に飛びたがったお前を助けたあの
時みたいな、こんな風によく晴れた日
が……」

小桜、手が震えだす。

律、もう片方の手で、小桜の

手の甲を包み込む。

小桜「律…大好き」

律「知ってる。もう何回も聞いた」

小桜、苦しそうに俯く。

やっと顔を上げると、優しい顔
をした律と目が合う。

小桜「……………律」

律「小桜」

小桜、大きく息を吸い込む。

ニパツと笑って、

小桜「愛してるよ！」

○（回想）律の自宅・寝室

律、汗だくで起き上がる。

ぼろぼろと泣いている。

律「うう、うううう……………」

ぎゅっとシーツを握りしめてい

る。

がちゃん、とドアが開く。

小桜（10）が立っている。

小桜 「律、どうしたの？」

律 「…来るな」

小桜 「泣いているの？」

律 「来るな！ 殺すぞ！」

律、自分の言った言葉にハツとする。

恐る恐る小桜を見る、

きよとんとした小桜、ニパツと

笑って、

小桜 「うん、いいよ！」

律 「…は？」

小桜 「いいよ。律に助けてもらった命だもん。律の好きにしていいいから！」

律、へなへなと力が抜ける。

どうしていいかわからず、オロオロする小桜。

律 「小桜。…ここ、来てくれるか？」

小桜、嬉しそうに律の隣に潜り込む。

並んで寝る小桜、律。

小桜、律に抱き着こうか迷う。気づいている律、小桜を抱き寄せる。

嬉しそうに抱きしめ返す小桜。

小桜 「律、だーいすき！」

律 「……うん」

律、泣きそうになっている。

（回想終了）

○函館山ロープウェイ（夜）

たくさんのお観光客たちが乗り込んでいます。

その中に、啓介の姿。

○ゴンドラ内（夜）

アナウンス「函館山は、標高334m。周囲9キロメートルの山で、明治32年から……」

親子連れ、座席で楽しそうに、

子供「うわあ、きれいだね！」

母親「そうだね」

子供「このお船、何で動いてるの？」

何でできてるの？」

母親「えー……うーん、電気とか、かなあ？」

啓介、親子連れに近づいて、

啓介「魔法ですよ」

子供「そうなの！？」

啓介「そう。函館には偉大な魔女がいるんだ。その魔女が、僕らのために一生懸命働いてくれたおかげなんだよ」

楽しそうな子供とは対照的に、いぶかし気な母親。そそくさと座席を移動していく。

○函館山（夜）

観光客でにぎわっている山頂。

啓介、スマートフォンで画面を

夜景が見えるように掲げる。

画面には、律と小桜。函館山を訪れた際に、隠し撮りしていたもの。

○高校・3年1組

桜の花びらが、窓から吹き込んでくる。

黒板には「卒業式」の文字。

優奈と真理恵、小桜が使っていた席を囲んでいる。

優奈「最後に会いたかったな……」

真理恵「レコードも返してもらえなかったしな？」

優奈「それは別にいいけど……いや、よくないけど！」

真理恵「でもまあ、よかったじゃん！あの時、あいつと一回だけでもデートできてさ」

優奈「……よかったのかな」

真理恵「ほら、彼女持ちだったのも、あのときわかったし。恋人がいるって、はつきり言われたんでしょ？ りつさ

ん、だっけ？」

優奈「うん。……でも、恋人だったのかな」

真理恵「つていうと？」

優奈「なんとなく、なんだけど……彼女とか恋人っていうよりはもつと……もつと、深くて分厚い関係のような気がした」

真理恵「なんだそりゃ」

優奈「だって、あときの椰史木くん……すごく、優しい顔してたから」

窓辺に、コザクラインコが止まる。

バラードの旋律をさえずり始める。

優奈と真理恵、気づいて駆け寄る。

真理恵「えー！ かわいいー！」

優奈「インコ？ 飼ってる人の家から逃げちゃったのかな」

真理恵「なんか餌あげようよ！ そうだ、さっきもらった記念品のクッキーあるじゃん！」

優奈「勝手にあげていいのかな…」

キュルキュルと鳴くインコ。

真理恵「ほら！ おなかすいてるって！」

優奈、カバンから記念品の箱を取り出す。クッキーを砕き、

インコに差し出す。

インコ、ものすごい勢いで啄んでいる。

真理恵「すご」

優奈「本当におなかすいてたんだね…」

真理恵、スマホでインコの写メ

を撮る。

画像検索。

真理恵「へー。この子、ラブバードっていうんだって」

優奈「ラブバード？」

真理恵「一途に愛を注ぐ、情熱的な性格：だって！ えっとこの子は…：コザクラインコって種類らしい」

優奈「コザクラ？ それって…」

インコ、飛び立っていく。

美しいバード調のさえずりが、いつまでも響いている。

(了)

本電子書籍は、2023 年 12 月 3 日発行の『第 27 回函館港イルミネーション映画祭 2023 第 27 回シナリオ大賞・受賞シナリオ集』より、準グランプリの作品を抜粋したものです。
シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第 29 回函館港イルミネーション映画祭 2023

第 27 回シナリオ大賞 準グランプリ

函館の魔女

作：葉槻ユイコ

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2024 年 3 月 1 日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番 19 号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>